

後期青銅器時代の都市国家を探る

—イスラエル、テル・レヘシュ第14次発掘調査(2025年)—

長谷川修一 立教大学文学部教授
小野塚拓造 東京国立博物館研究員
桑原 久男 天理大学文学部教授
橋本 英将 天理大学文学部教授
間舎 裕生 天理大学附属天理参考館学芸員

Investigating a City-state in the Late Bronze Age: The 14th Season of Excavation at Tel Rekhesh, Israel (2025)

HASEGAWA, Shuichi Professor, College of Arts, Rikkyo University
ONOZUKA, Takuzo Curator, Tokyo National Museum
KUWABARA, Hisao Professor, Faculty of Humanities, Tenri University
HASHIMOTO, Hidemasa Professor, Faculty of Humanities, Tenri University
KANSHA, Hiroo Curator, Tenri Sankokan Museum

1. はじめに

本稿では2025年8月17日～27日に実施したテル・レヘシュJ地区の発掘調査成果を、目下の調査課題とともに報告する。

テル・レヘシュは地中海東岸またはレヴァントと呼ばれる地域の南部に位置する遺跡で、現在のイスラエルの下ガリラヤ地方に含まれる(図1)。2006年に日本の調査団による発掘が始まり、第I期調査(2006～2010年)では居住史の大枠、すなわち、前期青銅器時代からローマ時代までの約3500年間(前3300年頃～後2世紀)に断続的に集落が営まれた遺跡であることが確認された。中でも、後期青銅器時代から初期鉄器時代にかけて継続的に繁栄した痕跡があること、鉄器時代末期(前7～6世紀か)に大型建造物が存在したこと、初期ローマ時代(前1世紀～後2世紀前半)に村落が営まれたことは注目に値する成果となった。第II期調査(2013～2017年)は遺跡の頂部に焦点を当て、鉄器時代末期の大型建造物と初期ローマ時代の村落址の解明に取り組んだ。2019年に始まった第III期調査では、後期青銅器時代から鉄器時代への移行期の精査と、後期青銅器時代層の実態解明を目標にJ地区の発掘調査を進めている。

2. 後期青銅器時代の南レヴァントと テル・レヘシュ

テル・レヘシュは、エジプト王の遠征記や旧約聖書に登場するアナハラトという町に比定されている。アナハラトは、アメンヘテプ2世のアジア遠征(前1419年頃)のターゲットになった都市で、王自身がこれを攻略し、多くの捕虜と戦利品を獲得したことが記録されている。また、前14世紀中頃に、エジプトと諸外国やレヴァントの都市国家との間で交わされた外交文書、いわゆる『アマルナ書簡』のうちの3点(EA237-239)が、胎土分析によって、テル・レヘシュからエジプトに送られた粘土板であると考えられている。これらの書簡からは、送り主がアッコやメギドといった周辺の都市国家と対立し、エジプト王に救援を求めていることがうかがえる(図1)。テル・レヘシュがアナハラトであり、アマルナ書簡の発信地でもあったことを証拠づけるのは簡単ではないが、テル・レヘシュの発掘で前15～前11世紀にかけての継続的な居住が確認されたこと、同遺跡がその当時の下ガリラヤ地方で最大の集落であったことが明らかになり、その蓋然性は高まっている。

後期青銅器時代(前15～前13世紀)のテル・レヘシュが「都市国家」であったならば、その実態はどのようなものだったのだろうか。その「都市国家」はなぜ初期鉄器時代まで継続的に繁栄できたのか。このよ

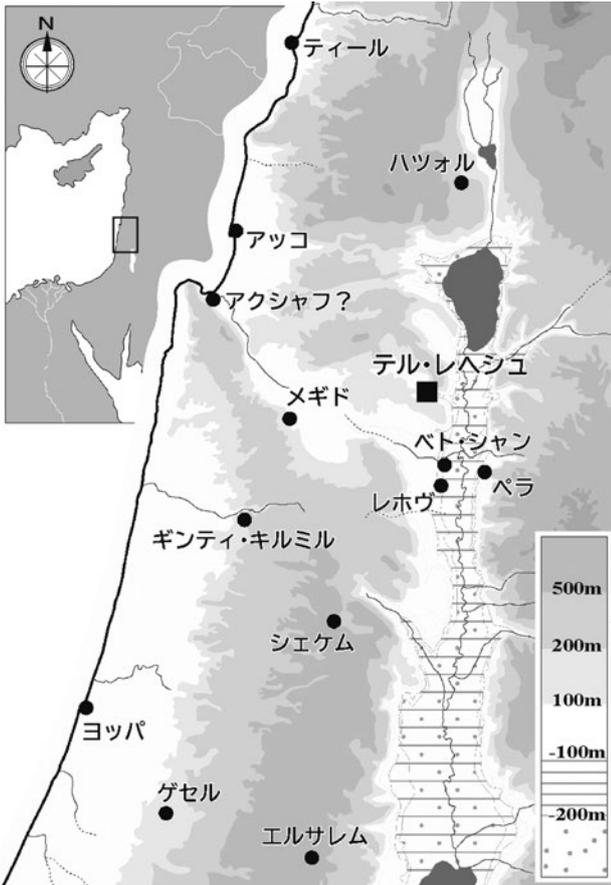


図1 テル・レハシュと後期青銅器時代の主な都市

うな研究課題に取り組むためには、後期青銅器時代層まで発掘を進め、考古学的なデータを蓄積していく必要がある。

3. 発掘前のJ地区の状況

テル・レハシュの北西部にテラス状に張り出した一角があり、調査団ではここを「下の町」と呼んでいる。「下の町」には鉄器時代末期や初期ローマ時代の居住層がないため、その時代の攪乱を受けていない。目下の調査課題である後期青銅器時代から初期鉄器時代（前12～前11世紀）の遺構が比較的良好に残っていると思われる。そこで第Ⅲ期調査では、「下の町」にJ地区を設け、5m×5mのグリッドに沿った7区画の発掘を開始した。2019年、2023年の発掘調査の結果、4つのグループの建築遺構が確認されていた（図3）。

1つはG2/3グリッドで発掘した直交する2つの石壁(W6043+W6047)である。出土した大量の土器片から初期鉄器時代に年代づけられる。壁は東西方向に少なくとも5.5mは伸びており、比較的広いスペース（部屋？）を形成している。覆土からは青銅製品の鑄造に用いたであろう坩堝（取瓶）や羽口の破片が5点出土しており、付近で金属加工が行われていたことを示唆している。

2つ目はF3グリッドで検出された南北方向に伸び

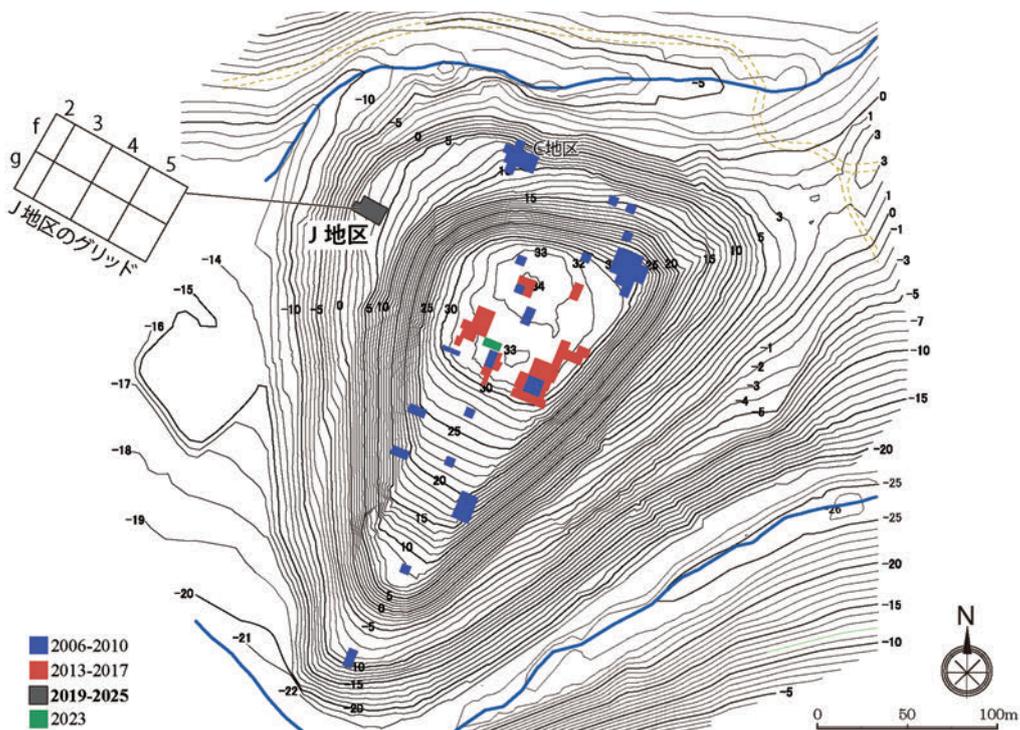


図2 テル・レハシュの地形と調査区

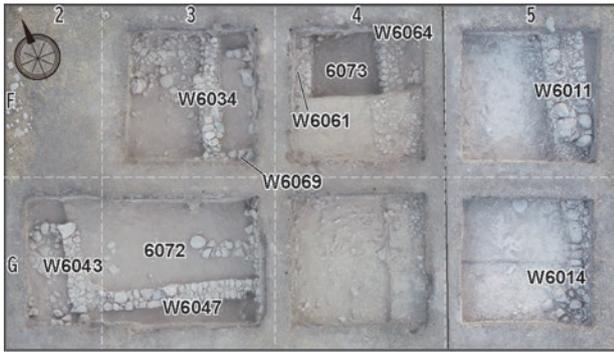


図3 2019年、2023年の発掘調査で確認された遺構(F/G5グリッドは2019年の写真)

る石壁(W6034)である。南端で東へ曲がる(W6069)。この遺構の上面は、先述した壁(W6047)よりも60cmほど高いので、後から建てられた建築であると目される。

3つ目として、F4グリッドの北半分を試掘したところ、2つの並行する石壁(W6061、W6064)が検出された。東側のW6064は斜めに傾いており、建物の壁ではなく、居住地の崩落を防ぐ擁壁であったかもしれない。これらの石壁は高さ1mほど残っており、床面(6073)も検出された。床面直上の土層からは初期鉄器時代の土器片に混じって、後期青銅器時代の土器片も多く出土した。この出土物から、2つの壁が他よりも古い時期(後期青銅器時代?)に建てられた可能性が想定された。

4つ目はF/G5グリッドで出土した南北方向の石壁(W6011+W6014)である。幅が1mほどあり、これまでに述べた壁に比べると強固な造りで、大きな石材も使われている。この石壁は積み直しの痕跡が観察でき、床面が少なくとも2面検出された。J地区の地形は北東から南西に向かって傾斜しており、この石壁(W6011)とG2グリッドのW6043との間には、3m近い比高差が存在する。

4. 今シーズンの発掘成果

G4グリッドでの発掘は、W6047の東方向への続きを確認することを目的に行われ、その先に、この建物(6072)の南東コーナーがあるかどうかも焦点となっていた。まずは、G3グリッドとG4グリッドの間の隔壁を除去してから、G4グリッド全体を掘り下げた。大量の落石を含んだ土層を60cmほど掘り下げ、W6047の続きを約2mわたって検出することができた(図4)。まだ床面(G2/3グリッドと同じレベル)まで到達していないこともあり、建物の南東コーナーの

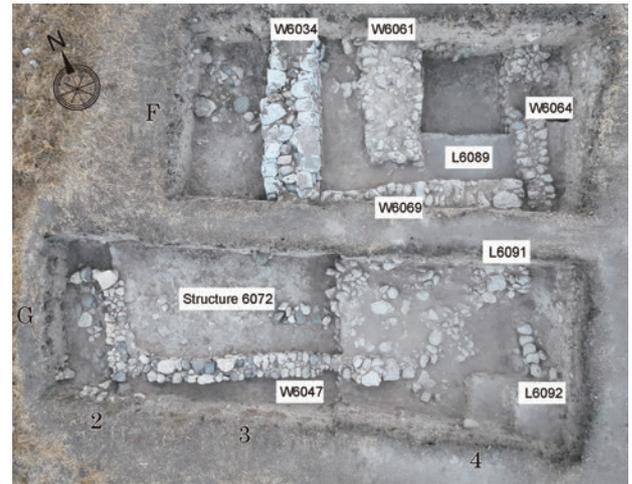


図4 2025年の発掘調査成果

有無については判然としていない。はっきりした遺構が残っていない可能性もある。床面の検出とW6047東端の精査は次の発掘まで持ち越しとなった。他方、調査区の北壁付近から幅1.2mほどの壁の断片とみられる遺構(L6091)が、東壁の手前からは石列の断片(L6092)が姿を現した。これらの断片的な遺構が何であったのかは分からないが、天端のレベルがW6047よりも40cmほど高いので、層位的には建物(6072)よりも後の時期に相当すると考えられる。

G4グリッドからは、かなりの量の土器片と動物骨が出土した。初期鉄器時代と後期青銅器時代の土器片が混ざって出土しており、遺構が初期鉄器時代に埋まったとみられる。興味深い遺物としては、埴埴(取瓶)の口縁部破片、神殿模型の断片、カーネリアン製ビーズが出土している(図5)。

F4グリッドでの発掘の目的は、南北方向の3本の壁(W6034、W6061、W6064)の関係性を探ることであった。最初にF3グリッドとF4グリッドの間の隔壁を撤去し、W6061の輪郭を明らかにしながら、昨シーズンに掘り残していたF4グリッド南半分を掘り下げた。発掘の結果、W6061が幅1.8mほどの分厚い壁であることが判明したほか、W6034の南端から東へ伸びるW6069の続きを検出することができた。W6069は幅1mほどの壁で、W6061の一部を壊して構築されたとみられる。その東端はW6064につながっている(厳密には接しておらず、僅かな隙間がある)。W6064はこの部分だけ石が積み直されており、W6069の石組みと高さをそろえたと考えられる(図6)。ある時期にW6069がつくられ、W6034、W6064とともに建物となっていたことが分かった。W6069は、



図5 G4グリッドの出土物 埴塙の口縁部破片(左)、神殿模型の断片(中)、カーネリアン製ビーズ(右)



図6 F3/4グリッドで出土した遺構(東から撮影)

掘り出された部分を見ると、少なくとも2段の石組みでできているが、東側のW6064付近では石1段分の厚さしかない。この上に日干しレンガの上部構造があったと目される。最後に、W6061とW6064の間に、灰が混じった土層(L6089)が堆積していたことも特筆される。この灰層は後期青銅器時代～初期鉄器時代の土器片を含んでおり、その大半は前者であった。

5. まとめ

今シーズンに発掘したグリッドでは、初期鉄器時代の建築層が2層ないし3層存在することが確認された。まず、ある時期に分厚い壁(W6061)と擁壁(W6064)が存在し、それらが同時に使われていた痕跡がある(床面6072)。この時期が初期鉄器時代なのか、後期青銅器時代まで遡るのかは、現時点では判断できない。その後、初期鉄器時代の間に、このスペースは土や灰の廃棄場所となり、灰混じりの土で埋まった。この土層の上に、建物(W6034+W6069+W6064の上部)が建てられた。このときにW6061は部分的に壊され、建

物の下に埋没したと考えられる。一方、G2/3/4グリッドで発掘された建築(W6043+W6047)は、レベル差からF3/4の建物よりも古いと考えられるが、それがW6061とW6064と同時期なのか、新しいのかを決める痕跡は得られていない。今後、初期鉄器時代のJ地区がどんな性格の区域であったのかを把握するためには、発掘区をもう少し広げて検討する必要があると思う。後期青銅器時代層の解明までは先が長いが今後も地道な調査を継続したい。

テル・レヘシュ第14次発掘調査は長谷川修一を団長に、科研費(23K22002—桑原久男)の助成を受けて実施した。発表者の他には、イツハク・パズ(イスラエル考古局)、イツハク・ガル、日本からのボランティアが4名、遺跡近郊のミスル村からの作業員3名が参加した。総勢14名のこぢんまりとしたシーズンであった。

■参考文献

- ・ Aharoni, Y. 1967 Anaharath. *Journal of Near Eastern Studies* 26, 212-215.
- ・ Goren, Y., I. Finkelstein and N. Na'aman 2004 *Inscribed in Clay: Provenance Study of the Amarna Letters and other Ancient Near Eastern Texts*. Tel Aviv, Yass Publications in Archaeology.
- ・ Moran, W. L. 1992 *The Amarna Letters*. Baltimore and London, The Johns Hopkins University Press.
- ・ Pritchard, J. B. (ed.) 1969 *Ancient Near Eastern Texts Relating to the Old Testament*. Princeton, Princeton University Press.
- ・ 桑原久男・間舎裕生・橋本英将・山野貴彦 2024「初期鉄器時代と初期ローマ時代のテル・レヘシュ—イスラエル、テル・レヘシュ第13次発掘調査(2023年)—」『第31回西アジア発掘調査報告会報告集』46-48頁 日本西アジア考古学会。
- ・ 橋本英将・小野塚拓造・桑原久男 2021「イスラエル国、テル・レヘシュの「下の町」—第12次調査(2019年)を中心に—」『第28回西アジア発掘調査報告会報告集』36-40頁 日本西アジア考古学会。